

労働組合と労働者協同組合と教育協同

永瀬 博忠（神奈川県／東京城北地域労働組合協議会事務局長）

1. はじめに 労働運動の内発的到達点として

(1)所謂、京浜工業地帯から少々入った東京北部の板橋区と豊島区の中小零細企業に働く労働者の私達の労働運動は、1960年代半頃から、個人加盟産業別地域別労働組合を目指して運動を蓄積してきました（「協同の発見」第5号外谷富二男「何故労働組合が労働者協同組合をつくるのか」を参照）。

この労働組合運動の中で、「自主と連帯」の必要性を痛感し、その具体的形態の一つとしての労働者協同組合運動への着手をすべきであろうとの認識に達しておりました。私達の特徴は、反合闘争、自主生産闘争そして企業体設立、労働者協同組合といったコースではなく、地域別個人的加盟制の特性をいかして、様々な種類の闘争体験を積みつつ、企業の存続状態の中で、企業を取りまく条件（ぜい弱な経営基盤、質量ともに貧弱な経営管理体制、労働規律、意欲、経営姿勢など）を変化させて、労働者自身の力で雇用・生活・権利を守る運動は何かを追求することから、労働者協同組合へ到達したのでした。

2. 調査・交流・研究の一定の期間を経過して

そのような到達にいて「職場の主人公になろう」と運動してきた私達に、1987年頃、中高年雇用・福祉事業団の活動が朝日新聞で紹介されました。これを契機に事業団とも交流が始まり、本格的な研究・交流時代に入りました。当時の私達の考え方は、労働者協同組合運動を形式的表面的に考えていました。従って、多数の仲間が一つの事業体をつくり、直接参画できない人も資金出資はして多くの仲間が同時に経営参加をする方向を考えていました。しかしその後数年間、様々な角度から検討してみると新しい方針が導き出されました。この期間の活動から外谷富二男氏が協同総研の常任理事に選出されるという積極的活動も生まれま

した。

私達が導き出した、数年間の実践と研究の結果の方針とは、条件を備えた個人又はグループが形式にこだわることなく、まず「自主と連帯」の基本精神を発揮して先発実践していき、運動を積み重ねていくというものです。この方針によって、三つの個人およびグループの「労働者協同組合」が生まれつつあります。幸いなことに「自主と連帯」は、今度新たに学ぶのではなく労働組合運動の中で「まず俺がの精神で積極的に活動しよう」ということや「兄弟のように助け合おう」といったスローガンで永年実践してきていますので、その上により意識的具体的につみ上げていくのであります。

3. 「教育学習」活動から「共育システム・共有協同」活動へ

私達は労働組合と労働者協同組合とを両立させ相互に補強しあうことを目指そうとしています。その際、この二つの分野を連結する部門は「共育（教育）・学習」活動だと考えています。なぜなら両分野ともに「人間発達・自己変革」が最も重要な課題だからです。従って私達が目指す「共有」は今までの知識偏重・技術型のものではなく、全人格的変容を伴うものを意味しています。

中小企業の労働運動の困難さは独占・大企業と違った面で、すさまじいばかりのものです。常に「学ぶ」ことをしないと、現実の壁の厚さと重さに押し潰されてしまいます。私達は16年間、8月と12月を除いて、毎月の最終土曜日を学習会として独特の学び方をしてきました。この「板豊学習会」だけでも通算160回行ったこととなります。

（「仕事の発見」No16今井三郎「中小企業労働組合運動の視点」参照）

この「板豊学習会」は今後も続けていきますが、それとは別に昨年、新しい企画を実践しました。

「リフレッシュセミナー」と称して3分野、3回ずつ計9回にわたり行いました。一つの分野は「元朝日新聞記者が語る戦後労働運動史」。第二分野は「日常の経済現象を考える」。第三分野は「自己と民主主義の心理学」で、受講者が全員全分野を聞き、ノートをとりました。

この「セミナー」の総括の中から「自己の確立の大切さ、自己を見失わない為には連帯が如何に大切であるか」を学ぶと共に、今の労働運動の弱体化は「独占資本側の教育の『成功』にある」との結論に達し、「自己と共同」「教育」の確立を私達自身の手でつくりあげようとの意志統一を行いました。そして、誕生したのが今年の4月から半年間を一期とする「共学舎」という協同組合的共有システムの実践です。

教師の人々と交流を過去からしてきて常に感じてきたのは、労働組合に理解をもっている教師でも「教育は学校と教師の仕事だ」という先入観があることです。

教育は、小・中・高又は大学といった特定の場所と特定の期間に限定された「時限教育」であってはならないと思います。生まれてから死ぬまで、いや子々孫々にいたる「永久教育」の一環として時々刻々あらゆる場所で、あらゆる機会に推進されるべきであり子供も教師も社会も相互に学び合い、相互に教え合い、連帯して自己改造による人間性の開発と創造に努めることをめざして「共学舎」と名付けてスタートを切りました。この運動を通じて、40歳～60歳の仲間の「向学心」が大変高いものであることがわかりました。

「教育」問題の対象は若者だけでなくことを痛感しました。また、ある程度「子育て」時期が終って夫婦で参加している人々が幾組かいます。更に強調したいことは、子供さんと共に出席する人がいます。若者達は高校生や大学生であります。

労働運動を真剣に貢献的にやってきた仲間達は直接の時間は、余りなかった人が多いのですが、自分の「背中」で子供を教育してきたことがわかりました。今、全国各地で、老若男女問わず、「学ぶ」ことを欲している人々が多数いるのでは

ないかと思われます。ただそれが表面化し大きな流れにならないのは、次の要因によるのではないのでしょうか。まず「学ぶ内容」が従来型の詰め込み式、教師の一方通行的授業。職場や居住宅から近くに学ぶ所がない。共に学び合う姿勢の「教師」がない。さらに「授講料」が高い。欠席したらわからなくなり、ついていけなくなる。自分の興味ある内容がない等々。

この為、私達は学ぶ内容、時間などについても講師の人々と共に「開校式」の日に討論して決めました。さらに欠席者の人を皆でどう助け合い共同歩調を進めるかを検討しています。科目は労働組合の学習だから推測がつかうと思われるでしょうが、私達は「自己変革」の出来る内容を目指し画一性は排除しました。歴史コース（幕末から現代迄を学びつつ、現在の位置を確認する）。哲学コース（子供や労働者の視点から人間をとらえ直す）経営経済コース（中小企業の経営のあり方を協同組合的視点で学ぶ）の三分野ですが、これを10月迄10回にわたり月2回のペースで行います。途中、コースセクトにならないように総会を開催します。将来は技術・工学・語学・法律・自然科学・文学などについてもコースをふやすつもりです。

それには地域の教育労働者とも連帯し、且つ「建物」も協同組合運動として建設できたらと考えています。「労働と共有の結合した」新しいタイプの「学校」をつくりあげようとしています。

4. 未来社会を展望して、実践で内在的に切りひらく

職場の厳しい労使関係の中で鍛えられた労働組合活動家が労働者協同組合の分野に係わり、より一層、労働運動の視野と深さを感じとり、遂に労働者、協同組合活動家が労働組合に接触することにより、人間の一筋縄では解決できない要求の多面複合性について理解を示すことが出来るようになる必要があります。

(13頁へつづく)